

若者よ、世界へ雄飛せよ

石井裕（南24期・MIT教授・メディアアラボ副所長・タンジブル・メディア・グループ・ディレクター）



お仕事で帰国中の石井裕さん（南24期）にご多忙なお仕事の合間を縫ってお会いすることができました。石井さんは、驚異的なイノベーションを次々と産み出すことで世界的に有名なMITメディアアラボの副所長であり、情報工学の先端を走る研究者として世界の「バトルフィールド」で日々奮闘されています。日本を飛び出し、アメリカで現在の地位を築くに至ったご自身の経験と人生訓。人生で出会ったこの一冊とは。そしてこれからの時代を生きる若者に向けて熱いメッセージをお聞きすることができました。

〈聞き手〉大河内学（南36期）

〈文〉垂水真（南36期）

〈写真〉西村彩子（南43期）

——はじめに南高時代のお話からお聞かせください。どんな高校生だったのでしょうか？

当時はそれなりに勉強ができましたし、自宅から通えるので南高へ進学しました。入学してみると、とんでもなく優秀で天才みたいな人もたくさんいて、自分の能力の限界がわかりました。高校時代の僕は深くものごとを考えることがなかった。ものごとをクリティカルに見ることがなかった。部活は、美術系、卓球など少しやりましたが、深く入れ込むことはありませんでした。

——当時の思い出は？

南高といえば焼きそばの「風月」ですね。あと、「唯我独尊」という喫茶店が札幌の都心にあって、そこでいろんな語らいがあったことを思い出します。笠原君という医学部へ行った同期がいるのですが、常に学年トップの成績でした。自分はトップレベルではなかったのですが、現実を正視するという点で、いい意味で揉まれたと思います。高校時代は自分自身がわかっていなかったし、将来も見えていなかった。僕は遅咲きだった

のだと思います。周りの先進的な学生はともシャープでした。今ニューヨークにいる元新聞部の武藤君は、当時から活発に先進的な活動をしていました。一方、僕は北海道大学を卒業してから、ようやくコンピュータ系に道を定め、NTTへ入社しました。

——なるほど。あまり想像できないですね。当時の同期生は現在の石井さんをどう思われるでしょうか？

あのころはともシャイで内気でした。ある意味で、「つまらない優等生」でした。ですから、今の私を想像する人は、ほとんどいなかったと思います。

——内向的だったと。でも女の子にはもてたのではないですか？

女性とは縁もなく極めて孤独でした。あのころは文学に傾倒していましたね。ひとりでリュックサックを担いで北海道、東北、九州まで周遊券で一人旅をする。それが今の僕の原点になっていると思います。ユースホステルに泊まりながら、立原道造、石川啄木、若山牧水、山頭火、宮沢賢治などを読み込んでいました。

文学少年くずれの理系学生。旅先での一時的な友人たちとの出会いと別れを繰り返していました。

——旅を愛する文学青年だったわけですね。石井さんのおすすめの本はありますか？「人生を変えたこの一冊」があれば教えてください。

『春と修羅』の「永訣の朝」です。MITから招聘された1995年に、離日の前に一度訪れてみたかった花巻市の宮沢賢治記念館へ行きました。その時「永訣の朝」の自筆原稿を見たのですが、あれは強烈でした。最愛の妹とし子の死の床の情景。もう一度会いたいと思って彷徨った北海道と東北。宗教的次元にまで自分の悲しみを高めようとしたその精神的葛藤。最愛の人を失った悲しみと痛みが、彼の言葉に凝縮されている。その痛みを、宗教と科学と文学、その3つのせめぎあいの中で、彼がどのように昇華させたか。その道を辿る旅でした。

——当時は将来も見えず、孤独に自身の内面を見つめていたわけですね。高校時代はただ悶々としていました。将来のことははっきりしていないし、



受験勉強があるため、何のために生きているのか、自分の存在とは何なのかということを考える時間も余裕もなく生きていました。

——悶々としていた時代に目指そうとしたものはあったのですか？

吟遊詩人や画家になれたらいいなというふうな、ふわふわした妄想はありました。自分で詩を書いたり、旅先で水彩スケッチを描いたりしましたが、結局、工学系に興味があったので、父の影響もあり、コンピュータを学ぶために工学部へ進みました。でも、今になって、あの頃から深い興味を



その中で生き残るためには、自分で「造山」するしかないのです。

——経験したことの無い世界では不安はつきものだと思います。何か振り所 ぶれない軸みたいなものがあるのでしょうか？

MITという「バトルフィールド」での実践体験が原点になりました。世界の最前線で戦う経験がとても重要でした。それなりに優秀な多くの人たちは、草野球の素人監督上がりで満足して、そこで終わってしまふ。大リーグでデッドボールを受け、死ぬ思いをしたことがない。僕はその「バトルフィールド」に足を踏み入れて、どうにかこうして生き伸びられた。改めて思い返してみても、無我夢中だったので、どうやると良いという方法論はわからないですね。ただし、いつも自分自身の持つ三つの力、「出杭力・道程力・造山力」を信じていました。——話は変わりますが、最近日本の学生の理系離れという話題もよく耳にしますし、日本の研究力も落ちていると言われていますが。

僕は日本に20年以上いないので確かなことは言えませんが、世界のトップ

で抜きつ抜かれつ最前線にいと、日本からは突出した人が見えてこないのです。落合陽一さんのような元気で超多彩な若手がもつと出てくると良いのですが。

——最近の若者は内向き志向で、空気読む世代。石井さんがおっしゃった「出杭力」というか、それを恐れる傾向にあると感じています。

僕が大切だと思うのは「飢餓感」「屈辱感」、そして「孤独感」。日本では飢えることがない。飢えていれば、目の前にあるものが食えるか食えないか瞬時にわかる。そのような戦いをしていく連中が世界にはいる。日本のようなコンフォート(快適)ゾーンに在る限りこの飢えは経験できませんよ。——快適な環境に安住せずに、挑戦し続けるエネルギーはどこにあるのでしょうか？

第二次世界大戦直後、シベリアの強制収容所を生き延びて、日本に生還した僕の父は、東京のアパートで出された魚を、骨以外、頭も内臓も尾ひれもすべて食べました。目の前にあるものが食べられることを瞬時に察知し、次の瞬間にそれに飛びつか

持っていた詩や絵画に関する美意識は、今の自分を助けてくれていると思います。

——私も子供のころから絵が好きで図面を描く仕事をしています。石井さんの「クリアボード」の発想も絵が好きだったこととつながっているのですか？

見ることを、描くことを、考えること。これらは三位一体です。それが「視考」(ビジュアル・シンキング)の基本です。建築家、プロダクトデザイナー、メカニカルエンジニア、画家、みんな日々やっていることです。アイデアをスケッチとして具体化しながら、リフレクション(内省)して、コンピューティング(思考)している。

——よくご講演の中で、3つのキーワード、「出杭力」、「道程力」、「造山力」についてお話されていますが、これらの言葉の意味と背景についてお話しいただけますか？

「出杭力」は、若いころの誰も相手にしてくれない屈辱感。自分を信じ、誰も打てないほど出過ぎるしかないのです。日本では、組織の中で新しいアイデアを言っても伝わりにくい。

なければ死んでしまふ。豊かな今日の日本に生きている我々は、目の前にある機会を瞬時に発見し、それに飛びつく力を失っている。腹が減るということは人間にとって根源的な苦痛なわけです。骨までにも食らいつくほどの「知的飢餓感」がなければ、世界の最前線では戦えないと思います。

——石井さんはご自身の研究をできるだけ多くの人にわかり易く伝えようとされていますね？

良い質問です。大切なことは、「インベンション」、即ちまったく新しいコンセプトを発明することと同様もうひとつとても大切なのは、人々を「インスパイア」すること。すなわちコミュニケーション。発明したものが人の心に伝わらなければ、ただのゴミなのです。高適な数学理論を説いても、ほとんどの人に無関係であれば単にサイロの中の出来事にすぎない。インベントしたものを、人々をインスパイアする形で伝えるためには、コミュニケーション・デザインの能力がなければならぬ。詩人のように、本質を抽象化・言語化する能力がなければならぬ。俳句が五七五の17

一方、MITでは新しい発想を否定されることはないが、突出しなければ認められない。日本では突出した人は生きにくい。ハンマーで頭を叩かれてしまう。それが「出る杭」ですね。MITでは徹底的に突出して、素晴らしいかつ美しい「出る杭」にならなければ生き残れない。

「道程力」は、自分の道を自分で切り拓くということです。僕が考える本当の競争とは、未開の原野を切り拓いて、孤独に耐えながら、ただ一人で全力疾走すること。そこには観客も審判もない。その道なき道を全力で突き進むところが本当の競争です。高村光太郎の「道程」に敬意を表して、「道程力」と呼んでいます。

「造山力」とは、既にある山に登るのではなくて、新しく山を自分の手で、海抜ゼロメートルから造る力。誰も考えたことない新しいビジョンを創り上げて、世界初の山を創り出すという意味です。自分が造った山に、自分自身が世界初登頂する。そして世界中の人がその山に登ろうとする。MITは世界のトップが集まる強烈な「知的バトルフィールド」でした。



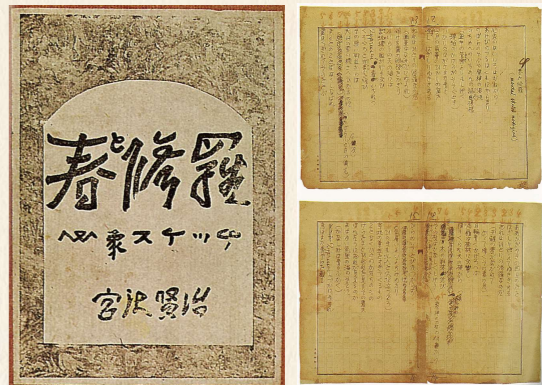
文字で宇宙を表現できるように、自分たちの研究をひとこと、ひとつのメタファーで説明する。僕の言葉は「タンジブル」。象徴的なものではなく、そろばん、そして空飛ぶ氷山の絵を使っていますが、そういう抽象化能力、表現能力が大事なのです。作品を見て涙するくらい感動してもらわなくていけないのです。「インベンション」と「インスパイア」は両輪なのです。

——芸術家の多くは高い言語能力を持っていますよね。

まったくその通りです。それがなければどうしようもない。自分の研究



春と修羅 宮沢賢治／著 自費出版（1924）



石井 裕 (いしい ひろし) Profile

1956年東京生まれ。1974年札幌南高等学校卒業。1980年北海道大学大学院情報工学専攻修士課程修了。日本電信電話公社(現 NTT)入社。1988年~94年 NTT ヒューマンインターフェース研究所において、リモートコラボレーション技術の研究に従事。1995年 MIT 准教授。メディアラボにおいてタンジブル・メディア・グループを創設。直接操作・感知可能なタンジブルユーザインタフェース Tangible Bits の研究を開始。2010年からデジタルコンピューターションにより形状と物理性質が動的に変化する未来のマテリアル、Radical Atoms の研究を創始。2001年に MIT から tenure を授与、2006年に CHI Academy に選出、2019年に ACM から SIGCHI Lifetime Research Award を授与される。

は素晴らしいが、人に伝えられない。あるいは伝えるべきがない。伝えてもよくわからない。そのようなことはいっぱいあります。僕の研究している世界、ヒューマン・マシン・インタラクションでは、人間がグループに入っているの、人々はインタラクションを通して、新しい気づきと感動がなければならぬ。そういう意味では、相対的には伝えやすい。伝える技術というのとはとても大切に、論理の力

だけではなく、詩を書くような芸術的抽象力が必要なのです。論理もアートも、うまく使い分けて、人々の心に訴求できる翻訳能力が必要です。——最後に、もし石井さんが南高時代に戻れるとしたら自分自身に何と
言ってあげたいですか？
「高校を辞めて、海外雄飛！」と言いたい。快適な場所札幌を離れ、風月も、友達もなく、言葉も通じない世界で、英語がブロークンだろうが伝えるものがあれば生きていける世界に飛び込んで欲しい。伝えるに値するものがなければ生きていけない世界に飛び込めと言いたい。もちろん南高は、札幌は、日本は素晴らしい。

決して飢えることもなく、日本語でお話できて、地下鉄南北線は綺麗で。それでも、快適ゾーンから出て、世界と他流試合をするべきなのです。私はようやく30歳代になって世界へ出たいと思いましたが、遅すぎたと思っています。もっと若い時に海外雄飛しなかったために、ずいぶん損したと思っています。10代のエネルギーに満ち満ちたあのときに飛び出して世界を見ていたら、もっと高いところに行けたと思います。残念ながらも僕の人生はそれほど残っていない。体力があって、お金がなくても感性が張り詰めている若い時期に異郷の地へ飛び込む。自分なんぼのものを測り思い知る。そして徹底的に鍛える。それを若いときにやるかやらないかではえらく違う。南高の後輩たちへ伝えるとしたら、今から「海外雄飛」、「他流試合」、「異種格闘技」を強く勧めたい。それが一番のメッセージです。まずは「快適ゾーンを抜け出し、世界に飛び出せ」と。